

「想像力」で乗り越える

副校長 角皆 裕文

長い休校期間が終わり、子どもたちが登校し始めて1ヶ月が経とうとしています。職員たちがこれまで経験したことのない対応を迫られる中、以前と変わらぬ姿で活動を始めた子どもたちを見て、職員一同安堵しています。保護者の皆様におかれましては、休校中の健康管理、生活リズムの維持に努めていただき、誠にありがとうございます。

一見元気に登校しているように見える子どもたちですが、生活様式の大きな変化に加え、休校から段階的な学校再開へと続く生活パターンの変化によって、心や体に変調をきたしている子もいると思われます。我々職員は引き続き、そうした子どもたちの変化に十分注意を払いながら、日々の生活を支援して参ります。

己の欲せざるところは人に施すなかれ

話は変わりますが、中国に伝わる「論語」に記されているこの言葉。私が出会ったのは中学校の古典の授業だったでしょうか。

「なるほど、うまいこと言うなあ。」

基準として明確な線を引くわけではなく、自らの心と対話させることで行動を抑制させ、人々に良い関係を築かせる。このシンプルな言葉は多感な私の心に刺さり、大人になってある経験をするまでは、ある種の“心の道しるべ”となっていました。ある経験をするまでは――。

「どうして〇〇さんにこんなことしたの？自分がされたらイヤでしょ？」

「別に。僕はされてもイヤじゃないもん。」

教員になって、子ども同士のトラブルに割って入った際に、度々このような言葉を聞くようになったのです。よく考えてみれば、自分と相手の“して欲しくないこと”が完全に一致するはずがありません。それからというもの、私は子どもたちに「あなたは平気かもしれないけど、〇〇さんは嫌だったんだって。」と話すようになりました。

自分の欲しくないことだけでなく、相手の欲しくないことにまで想像を働かせる。この「想像力」こそが、みんなが安心して、豊かに過ごすために必要なのだ、と考えるようになったのです。

大人に「想像力」は備わっているか

学校ではみんなと同じように行動することを求められる場面が多くあります。みんなと同じように宿題を提出する。まっすぐ並ぶ。自分の考えを発表する。そうした中で、我々大人も「同じようにできない子」に対して、「何か理由があるのかもしれない」と想像力を働かせる必要があります。

そしてこのコロナ禍における新生活。ウイルスへの感染リスクを減らすために新しい生活様式が求められてはいますが、何らかの事情によりその枠からはみ出した人を私自身がどういう目で見ているか、自問しなければなりません。

学校で、まちで、そして社会で、無用な分断や不当な差別を生まないようにするためにも、この「想像力」は大きな力を貸してくれるはずです。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校での消毒等を徹底しております。前回の学校だよりで呼びかけたところ、地域の方からたくさんのタオル、古布等を提供いただきました。誠にありがとうございます。今後ともご協力いただく場面があると思いますが、引き続きよろしく願いいたします。

学校長 梅田 比奈子